

## 明日への伝言

せんだい3・11メモリアル交流館の活動について、館長の佐藤敏行さんとイラストレーター佐藤ジュンコさんにお話を伺いました。



## 第12回 せんだい3.11メモリアル交流館

震災の記憶や経験を伝承する施設として、地下鉄荒井駅舎内に、平成27年12月に一部、翌年2月に全館オープン。震災の被害状況や復興の歩みを紹介する常設展示やさまざまな視点から震災を伝える企画展示のほか、多彩な交流イベントも開催しています。

## 語り継ぎつなぐ地域の思い

展示やイベントなどを通して震災を知り学ぶ施設である交流館は、東部沿岸部への玄関口として、地域を見つめてきました。「震災が起きた3月11日にまつわることでなく、かつて沿岸部で育まれていた豊かな生活文化を語り継ぐこと、それを人との交わりを通して行うことを大切にしています」と語る佐藤館長。開館に当たり、沿岸部の巨大なイラストマップを2階に展示。イラストを手掛けたジュンコさんは「来館した方が、震災前の暮らしぶりを付箋に書いて貼ってくれたり、ここでこんなキノコが採れたんだよなどと教えてくれたり」。それらの記憶を展示後も描き足していきました。「私も自分の故郷や住んでいる地域を知りたいと思うようになりました」と話します。令和元年には「海辺のメモリアルソーダ」を発売。ソーダには、ジュンコさんが沿岸部に縁のある方たちの話を聞き、思いを描いたミ



▲縦約2.5メートル、横約6.4メートルの巨大なイラストマップ

そしてこれからというように、時間軸をつくり描いています。私もつなぎ目となり、分けてもらった大事な思い出を誰かにつなぐことができなければいいですね」とジュンコさん。「復興って、発災の時点から考えてしまいがちですが、復興の種は震災前の暮らしの中にあるのではないのでしょうか。それを伝えるのに、親しみやすいジュンコさんのイラストの力は大きい」と佐藤館長も続けます。交流館では、竹を使った遊びや荒浜でのたこ揚げなど、地域の暮らしを伝えるイベントも行っています。「地域に脈々と受け継がれてきた文化や営みを肌で感じ、その手触りや感触などを次の世代に『つなぐ』。そして、今を大切にしながら地域の方に寄り添い『すこす』。この取り組みを大切に続けていきたいですね」と佐藤館長は語ります。

## それぞれの震災への思いを未来へ

佐藤館長は「震災から10年がたち、やっとここに来ることができたとい

う方が、確かにいます。一方で、気持ちの整理がつかずまだお越しいただけない方もいる。そういう方には『いつでもお待ちしています』と伝えたいですね」と話します。震災後、誰かの役に立つことを何もできなかったという思いを抱えていたジュンコさん。マップなどの制作を通して、自分なりのやり方で震災に関わることでできると感じたそう。「今からでも震災に関わることができると思いますが、被害の程度に関わらずそれぞれの被災体験を大切にしたいと感じています。そういう話を聞いて取り上げることができれば」と話します。ジュンコさんは「押しつけがましくないところが、交流館のいいところ。地域の方々が話してくれた震災や地域の記憶の集積が、これから少しずつここにあり続けてほしいですね」と思いを語ります。「今後も施設の名前である交流をさらに広げながら、知識や経験をお互いに積み上げて行く相互の語り継ぎを深めていきたい。語り継いできた皆さんの思いがここ交流館に宿り、未来世代につながっていくといいですね」と佐藤館長。穏やかなまなざしで、未来へつなげる道を見つめるお二人でした。



▲佐藤館長(左)とジュンコさん(右)